

使徒パウロの全人的教育

(一)テサロニケ二・六(一二)

「同じ柔道部なのに何かが違う。やはり玉川の学生は品がある」と思ったその学校に妻であり同業者が通い卒業することになるとは思わなかった。そんな玉川学園の教育のモットーの一つが「全人教育」。創立者、小原國芳は知育一辺倒ではなく、教養を重視し、道徳、芸術、宗教、労作などを重視し、調和ある人格としての全人を目指したのである。その実践は二一世紀になっても続き、通信教育部でも労作教育は必修だった。大したものである。

一、母のようにやさしく

パウロの人となりは一般に厳しく激烈なものと解される。確かにガラテ

ヤ人への手紙や、弟子のヨハネ・マルコを切り捨てたくだり(使徒一六章参照)を読めばそういう部分もあったろうことは容易に想像がつく。しかしそれらをもって彼の全てがそうだと論断するのは正当ではない。現にパウロ自身によるこの手紙の中には彼のテサロニケ教会に対する母のような優しさがにじみ出ている(七節)。また続く八節には彼のかたる母の愛は命がけのものであることが示される。当たり前なことだが母の愛は「命がけ」。それはある意味「執着」の変形といっても良いほど強いもの。しかしそうした「強さ」がなければ子どもの発育は困難だ。そうした神の「ねたむ愛」をもって、かの使徒はテサロニケ教会の成長に尽力したのだ。

二、こどもと同じ目線で

新改訳の本文を読むと「母と父はすぐ分かるが子どもはどこに出てくるの」と思う方がほとんどだと思う。しかし七節の欄外注には「子どものようになりました」という異本があることが示されている。原文では優しいは「エーピオイ」、子ども(より正確には嬰兒)「ネーピオイ」である。要はNの音一つの差だ。更にいえばその前の単語の末尾はNの音である。時に古代の写本には分かち書きという概念はない。だ

から「やさしく」と書かれた写本と「赤ちゃんのようになつた」という写本の両方が出まわり、どちらがパウロの真筆かということは甲乙つけがたいということで欄外にもう一つの可能性が書かれているのだ。では母親のように赤ちゃんになつたという意味はと言えば、母親が赤ちゃんに対して喃語交じりに答えることを指すのではという指摘があるが、興味深い見解である。パウロは使徒だのなんだのという袂を脱いで救われたばかりの彼らと同じ地平、同じ目線で語り、生きたのであった。

三、父のように勧め、命じる

このようにパウロは一面において母のごとく熱愛し、同じ目線で愛するテサロニケ教会の姉妹と接していたが、単なる「お友達」的な付き合いではなかった。彼は権威なき者のごとくにふるまつたが、権威を捨てることはしていなかった。むしろ教えるときには厳父のごとく神にふさわしく歩むように勧め、慰め、おごそかに命じたのである。日本、ことに戦後日本では「教育ママ」「お受験ママ」なることばがあるように子どもの教育は主に専業主婦たる女性が主要な位置を占めてきたように思えるが、ユダヤ人社会では教えと訓戒は「子どもらよ。父の訓戒に聞き従い、悟りを得るように心がけよ(参考：箴四・一)」

とあるように父親の主要な勤めであった。パウロはその役を見事に引き受け、テサロニケ信徒たちの信仰を育て、その結果彼らは召しの神にふさわしく歩むようになったのである。

* * *

「正統的キリスト教信仰においては『何を信じるか』が『どう生きるか』に先立つ」というのが公理である。しかし真実にイエスを信じ、従ってゆくならば何を信じるかは、何を信じるかにとどまるはずはない。それは必ず変革された行動を生み出し、そしてその行動はイエスのごとき、パウロのごとき全人性を持ったものになる。なぜならそれこそが神の教え、キリストの教えの本質だからである。人間は偏った存在である。母のごとき燃える愛着、父のごとき真実で権威ある教え、そして被援助者と同じ目線になる権威とは無縁の子どものやさしさ。それらすべてを一つの人格に統合させることは容易ではない。しかしそれは可能だ。パウロがそうしたようにキリストを生きたのだ。「人生のもっとも苦しい いやな 損な場面を真っ先に微笑みを以つて担当せよ」玉川学園のモットーを実現させるためにも唯一にして究極の「全人」イエスに学び続けたい。